

県教研に参加された先生方の授業実践

1年「あきとふれあおう」

矢作北小学校 酒井 孝康

○実践

気付きの質を高めるために、五感を使って秋を繰り返し観察し表現する活動を、単元を通して行った。初めはなかなか視点を定めて秋を観察できず、絵も文もかけない子もいた。手立てとして、観察する視点ごとに色分けした五感シールを貼って秋を観察した。視点を定めることで秋の変化に気付く子供も増えていった。また、見つけた秋の物を自分だけの宝箱に集めたり、クイズにしたりすることで、もっと見つけたいという活動への意欲を高めていった。中でも、見つけた秋を当てるゲームでは、ヒントを出しても最初はなかなか答えを分かってもらえなかったことから、友達に分かりやすく伝えたいという思いをもつようになった。こうしたゲームをする中で、気付きを共有化していくこともできた。秋の変化を伝え合う活動では、子供たちは自分の見つけた秋についてつなげて発言をしていった。中には教師の用意した色の変化の分かるカキの葉の写真では納得せず、教材提示機を使って自分が見つけた秋について説明する子もいた。秋に対する確かな気付きがあったからこそ、自分の気付きについて自信をもって表現できた。

○成果

視点を定めて対象を継続観察することは子供たちの直感的気付きを発見的気付きに高めるのに有効であったと言える。また、見つけた秋を使い、ゲームをすることなども子供の意欲を高め気付きを共通理解するのに有効であった。表現する場では、気付きについてつなげて発言することはできたものの、気付きを思考的気付きや再認識の気付きにまで高められる子供は少なかった。



<自分の気付きを表現する子供>

2年「野菜を育てよう」

広幡小学校 河合 教恵

○実践

一人一鉢で夏野菜を栽培する実践を行った。まず、栽培活動に見通しをもち、興味関心を持続しながら取り組めるように、「野菜のお父さんやお母さんとして、元気な野菜を育てよう」というめあてを立て、育てたい野菜について図書資料を使って調べる活動から入った。野菜の観察では、「野菜とお話しよう」「野菜の気持ちを書こう」など、野菜と同じ目線で書く活動を取り入れた。

不思議そうな表情を浮かべていた子もいたが、「野菜のお父さんやお母さんなら、子供の声が聞こえるよ」と伝え、じっと野菜を見つめ、集中して野菜と対話する姿が見られた。また、野菜の成長や気付きを話し合う場では、それぞれの野菜を比べて、共通点や相違点を見つける活動を試みた。ミニトマトやキュウリの花の色は黄色だが、児童Aの「(ナスの)花の中に黄色い棒みたいなものがある」の発言から、「花には黄色が多い。黄色は目立つ色だし、何でかな。」と新しい疑問を抱くこともできた。

【児童A】
わたしは、きょう、やさいとお話しました。わたしが、「なっちゃん、大きくなったね。水はたりている。」と聞いたら、風にゆられながら、「水はたりているよ。」と、なっちゃんが言いかえしてくれました。

（省略）

<「野菜とお話しよう」の作文>

○成果

明確で分かりやすいめあてを立てることで、子供たちは「野菜のお父さんやお母さん」として意欲的に栽培活動に取り組み、活動意欲を持続させることもできた。野菜と対話する活動を繰り返すことで、よく観察するようになったり、野菜の気持ちにたって考えたりできるようになった。野菜の共通点や相違点を見つけることは、理科の科学的な見方や考え方の基礎につながっていく。また、共通点や相違点に気付いたことは、気付きの深まりへとつながっていくと考えられる。